

みんなで考えよう！
川と私たちの未来

このままでいいの？ 球磨川の流域治水

現在進められている球磨川の「流域治水」の問題点について、わかりやすくお伝えします

川辺川ダムがあっても命は守れなかった



瀬戸石ダム下流のJR瀬戸石駅

7・4球磨川豪雨災害では、流域で50名の方が亡くなられました。

人吉市で亡くなられた20名の方々の時刻や状況について、住民と国会議員で調査した結果、そのほとんどは球磨川本流の氾濫ではなく、支川からの洪水や用排水路に流され亡くなっていたことが明らかになりました。亡くなった時刻や氾濫の状況から、ほとんどの方の命が川辺川ダムがあっても救えなかったと推定されます。下流では、瀬戸石ダムによる上流の水位上昇、下流の流速流量の増加が原因となり亡くなられたと思われる方もいらっしゃいました。

しかし、国は球磨川本流の治水対策しか検討せず、これらの検証を一切行っていません。まずはこれらの詳細な検証が必要です。

被災者に多い「ダムはいらない」の声



被災者の会と国会議員による被災調査

「7・4球磨川流域豪雨災害被災者・賛同者の会」が行ったアンケート調査によれば、水害対策として望むこととして「流水型ダムを作る」と回答した人はわずか8.1%。それに対し、「堆積土砂の撤去」「河道の掘削」は40%前後、「山林の保全」も40.7%でした。

気候変動により予測がつかない豪雨が降る時代になりました。ダムがあっても命は守れず、ダム頼みの治水が逆に命を危険にさらします。ダムを中心とした洪水対策には限界があるのです。

蒲島知事は「民意が変わった」として、13年前の川辺川ダム白紙撤回宣言から方針転換しましたが、アンケートで見る限り、被災者はダムを求めておらず、民意は変わっていません。民意が変わったとする根拠は不十分です。

水に浸かりながら聞いた「市房ダム緊急放流」の恐怖！



全国放送された緊急放流の知らせ

7月4日の朝、2階や屋根の上に多くの方々が避難している中に飛び込んできた「市房ダム緊急放流」の知らせを聞き、わたしたちは恐怖に震えました。

国や県は昨年豪雨での市房ダムの効果を大きく宣伝するだけで、緊急放流していた場合に想定される被害について、一切説明も検証もしていません。市房ダムは過去に3度も緊急放流をしており、線状降水帯による異常豪雨はこれからも続きます。川辺川上流で同様の雨が降り、もしも川辺川ダムができていたら、市房・川辺川ダムの同時緊急放流、数メートルの急激な水位上昇もありえます。

2018年西日本豪雨の際、愛媛県ひじかわ肱川では、ダム緊急放流が原因の水害で9名が亡くなり、現在遺族らによる裁判が係争中です。緊急放流は命をも奪うのです。

ダム上下流の被害を拡大させた 瀬戸石ダムは撤去すべき



昨年豪雨時の瀬戸石ダムのようす

川のまんなかにな大きな構造物があれば、流れを妨げます。瀬戸石ダムによって水面は常に高くなり、さらに大量の堆積土砂が水位を上げ、球磨村や芦北町では大雨の度に洪水が頻発していました。7・4豪雨災害以前から、国は瀬戸石ダム管理者である電源開発株式会社に対して土砂撤去命令を出していたほどです。7・4豪雨災害では、瀬戸石ダムのためにダム上流と下流の両方で甚大な被害が起きました。

瀬戸石ダムは治水に役立たないどころか、被害を拡大させます。一企業の利益のために流域住民が洪水の危険にさらされ続けています。瀬戸石ダムはただちに撤去すべきです。